

思い出との別れの山で

北高生が厚真災害ボランティア



発行所
帯広市稲田町基線8-2
帯広北高等学校新聞局
発行責任者
信太優希



可燃ごみの山の中から不燃ごみを取り出す作業をするボランティア局



説明を受けこれから作業に向かう局員

作業の数限りなく

9月24日、本校チアリーディング部17名、ボランティアア局3名、新聞局1名が厚真町でボランティア活動を行った。チアリーディング部は、避難所になっている厚真町スポーツセンター、福祉センター前で演技を行ない、避難所の住民にエールを送った。ボランティアア局と新聞局は、総合ケアセンターでボランティアサロンの設置、災害ごみ集積場でごみの仕分け作業を行った。チア部は演技終了後、ごみの仕分け作業に加わった。

震度7の痕跡

朝7時に学校を出発し、バスで厚真町に向かった。約3時間で到着した。厚真に入った時、地震直後に通行止めになっていた道道10号線では、地震による土砂崩れの痕跡を見ることがで

きた。

町の遺跡調査事務所がボランティアセンターになっていた。受付をして黄色のビブスもらい、名前のステッカーを体に貼った。担当の方の説明を受けて、最初の作業であるボランティアサロンの設置のために総合ケアセンターに移動した。

そこではサロンの看板になる紙の貼り付けや、棚の設置、ポットや皿やコップの準備をした。備品には「災害VC」とマジックで書き込んだ。

設置が終わった後、ちょうど外では炊き出しが行われていて、多くの人が並んでいた。70歳ぐらいの地元男性が私たちのところに来て地震の話をしてくれた。「最初の縦揺れは、

作業要請を待つ一般ボランティア



される。半壊した家からの家財の搬出、物置の中の搬出、納屋の整理や割れた窓ガラスの片付け、薪の積み直し作業、庭の灯籠の修理、1・4メートルの高さの金庫を2階から1階へ下ろす、など。ボランティアの人たちは積極的に手を挙げて指示された現場に向かっていた。

私たちは昼食後、センター内の掃除や椅子の整頓、寄せ書きをした。寄せ書きには歌手のさだまさしさんのものもあった。私がさださんのファンだということをスタッフの方に話すと、さださんが差し入れてくれたという「浅田飴」を私たちにくれた。寄せ書きをしてくれる人は意外と少ないそうで、私たちが寄せ書きをするとても喜んでくれた。

浅田飴

ボランティアセンターに戻ると、50人ぐらいの一般ボランティアが待機している。道内や道外の人ばかりで、外国の人や小学生の子どももいた。スタッフからボランティア要請人数と場所と内容が一件ずつ発表

散弾銃の弾

次に、災害ごみの集積場でごみの分別作業を行った。厚真川沿いのパークゴルフ場に、災害ごみが種類ごとに集められていて、それぞれ山になっている。不法に投棄されているごみの山もあり、前日その山から散弾銃の弾が発見され、警察が来て調べていた。

(記事は裏面に続く)

大切な物をやむなく放棄

災害ごみの集積場に衝撃を受ける

生活用品の山

私たちは燃えるごみの山の中から燃えないごみを抜き出す作業を行った。すぐに、いろいろな物が捨てられているのを知った。レコーダやCD、教科書、図鑑、絵の具セット、油絵のキャンパス、リコーダー、双眼鏡、ぬいぐるみ、オセロ、ビデオテープ、ゲームボーイとたくさんのカセット、五月人形、大量に集めたペトトボトルキャップ、眼鏡、化粧品とポーチ、中身が入ったままの財布、そろばん、通学かばん、洗顔液の瓶、コップ、洗面器、歯ブラシ、台所用品、キャリーバッグ、



ごみの中にあつたトロフィー

腕時計、カーペットなど。

また、剣道大会のトロフィー、柔道大会で活躍した新聞記事の切り抜きノート、中学校卒業記念の置物、赤ちゃんのお誕生日記念の写真立て、結婚記念の絵皿、札幌オリンピック記念の石の置

物など思い出の品もあった。

午後3時の帰る時間になり、センターに戻って担当の山ノ下さんにお礼を言い、厚真を後にした。作業のお礼として、水とポテトチップスを受け取った。また、チア部がお礼としていただいた、ぐんまちちゃんのキーホルダーとJ.A青森のりんごジュースが私たちにも配られた。午後6時40分頃学校に着いた。

多くの支援

ボランティア局長の森楓香さん(2E)は、「ごみは思っていたよりも大量に集まっていて、分別作業が大

変だった。厚真に来る途中で山崩れの様子や断層に生えていた木の根っこが見えた。帯広は震度4で停電だけだったが、厚真では家が壊れているのを目の当たりにした。私の家でも大きな地震が来たときに備えて対策をした」と語った。

また、同局員の大竹彩恵さん(2C)は「道路の液化化現象を初めて見た。そこまでひどいとは思わなかった。避難所を見て、生活に苦労されている様子が感じられたが、他の地域からボランティアが来たり支援物資がたくさん届いていて、いろいろな人の助けで生活できていることがわかった」と感想を述べた。

のぶちゃん のつばやまき

最近、さだまさしさんにハマっている。ついこの間、ベスト盤のCDを手に入れてから、毎日聴いている▼私の好きな曲の一つは「案山子(か

かし)」で、歌詞にある「元気でいるか」は親元から離れた子への心配な気持ちで描かれていて、とても胸に響き、特にいちばん好きだ▼次に好きな「道化師のソネット」は若くして亡くなるピエロの話を描いたのだが、歌詞にある「笑ってよ君のために」はピエロが大切な人のことを思っていて

元気でいるか

▼3番目に好きな「親父の一番長い日」は、娘を送り出した親父の気持ちを兄の目線から見て、嬉しい様で寂しい気持ちで描かれている▼さださんは大学時代は落語研究会の出身で、トークが面白く、月1回のTV番組「今夜も生でさだまさし」を私は楽しみに観ている。また、誰に対しても心配してくれて、優しさがあるので、私は好きだ▼さて、また「案山子」でも聴こうかな(何回もリピートして)▼次の回まで、ごきげんよう。



一般ボランティアと協力してサロンを設置

「感動したありがとう」

避難所2ヶ所でチア部が演技



被災者に演技を見せるチア部

チアリーダーディング部は2ヶ所の避難所で演技を見せ、被災者を励ました。あわせて約60人の観客が声援を送った。「楽しみにしていた」と声をかけてくれた

る男性のお年寄りもいた。演技をする上で困難なことは、平らではない状態の所で演技しなければならぬことだ。「地面を確実に踏む意識をもって演技に臨んだ」と山路海那部長(3D)は回想する。「演技を見ている人は、泣いたり笑ったりいろいろな思いがあるんだなと思った。演技することによって、笑顔と元氣と勇気が与えられた。拍手をもらって、見ている人の暖かさを感じた」。演技中は観客とハイタッチも。「感動した」「ありがとう」という声の子どもからお年寄りまであがった。

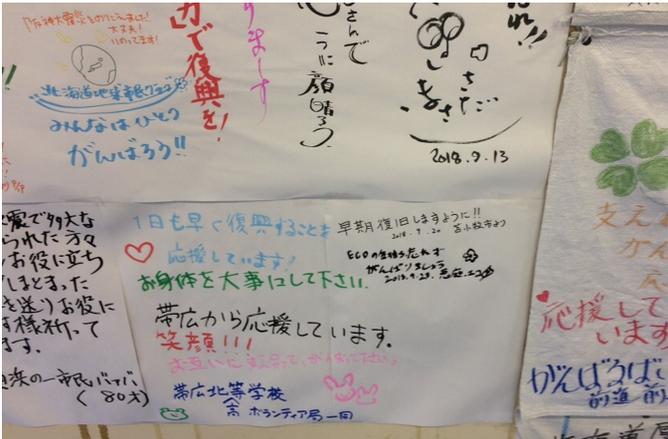
演技後はボランティア局の作業に加わった。山路さんは「被害にあった人のいろいろな物があり、思い出の品もたくさんあって、複雑な気持ちになった。少しでも私たちが貢献できたと思う。できるだけはやく復興することを願う」と述べた。

作業毎日続く

厚真でボランティアをしてみても、特に災害ごみの集積場には衝撃を受けた。多くの物が捨てられてあって、そこに住民の思い出の品もあったことから、その人がやむなくそれを放棄せざるを得なかった悔しさや思うと、涙が出そうになった。

作業は大変なところもあったが、微力ながら役に立つことができたと思う。また、厚真の人たちや全国から集まったたくさんボランティアの人たちの頑張る姿を見ることができた。山ノ下さんの話では、ボランティア

の数が一日に多く集まりすぎて、逆に仕事を割り当てられず申し訳ないそうだ。「作業は毎日続くので、平日にもボランティアに来てくれると本当に助かる。今はたくさんの方がここに駆けつけてくれるが、地震後何日も経って、ボランティアの数も徐々に減って、そのうち忘れられてしまうのではないかと怖い。それが怖い。復興作業はこれからもずっと続く。ぜひ今後時間もあれば力を貸してほしい」と語った。



下方はボランティア部による寄せ書き。右上はさだまさしさんのもの